
父へ息子へ～永久なるMagic Show～

朧月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

父へ息子へ〜永久なるMagic Show〜

【Nコード】

N9195E

【作者名】

朧月

【あらすじ】

幼い頃、いつも親父にマジックを見せるのが楽しみだった。一つ歳を取るごとに、成長した手品で今度こそ、親父のポーカーフェイスを崩してやるんだ。必死でそんな事ばかり考えていた誕生日。いつも親父に敵わなかったけど、今でもずっと、その思いは続いている。

六月二十一日、米花美術館。

白い衣装を身に纏った一人の男が、宝石を手にもうとそこから飛び立とうとしていた。

いつも通りの鮮やかな手口は警察の目をしっかりとごまかし、後はこの逃走経路から逃げるだけ。けれど、背中に感じた気配に、彼は笑みを浮かべ振り返った。

「残念だが……警察の目は誤魔化せても、私の目をすり抜ける事は出来なかったようだ。怪盗キッド」

腕を組んで壁に寄りかかり、ふっと笑みを浮かべた男に、彼は静かに首を振った。

「……いや、君なら警察達と違い私のトリックを見破ってしまう事など百も承知。そして、この窓と部屋の仕掛けも入った時に気づいていましたよ」

「ならば、大人しく観念するかな？」

その言葉に、彼は「まさか」と呟き笑った。

懐からトランプ銃を取り出し、それを壁にいる男に向けて発砲する。

「申し訳ないが、今日は間違っても捕まるわけには行かない。私にとって、大切な日なんですね」

口元のひげが、彼が笑みを浮かべるのにあわせてゆっくりと持ち

上がった。

外はもう月明かりだけで照らされていた。そんな夜遅くの時分。空を飛びながら、昼間の息子の驚いた顔を思い出し、思わずふつと笑った。

毎年見せられるマジックも、年齢と共に成長している息子の一年が、楽しみでならなかった。

子供の時、いつもいつも親父の大きな背中に憧れて、自分も早くそうなりたいと思っていた。

早く小学校にあがりたい、二年生、三年生、そして六年生になって次は中学生。一年一年の成長がすごく楽しみだった。

一つ歳をとるバースデーはいつも貴重で、ワクワクする事ばかり、楽しみだらけで。

一番楽しみだったのは、まだ幼い、親父がいた日のバースデーだったけれど。

「快斗、ちょっと来てごらん」

「なに？」

静かに微笑んで、手招きする親父に、ワクワクしながら歩み寄った。こんな時、親父は大抵何かを考えてサプライズを計画しているんだ。それを知ってるから、胸も高鳴る。

そんなオレを見て、親父の顔には小さな笑みを浮かべた。

「快斗、随分わくわくしてるようだな、顔に出てるぞ」

「でも、今年は何されても驚かないからね。……ばおかあふえいす、だろ？」

親父は一瞬きょとんとした顔を浮かべ、すぐに元の余裕たつぷりな笑顔……いや、元のそれより深い笑みを口元に浮かべた。

「ほお、マジシャンに一步近づいたというわけか？」

「そうだよ！ オレどんどん成長してんだぜ。去年より、1ヶ月前より、沢山マジックだって覚えてんだ」

新しく考えてみた手品見てよ、とポケットからトランプを取り出した。

やっのご覧、と言われて親父にトランプを引いてもらう。トランプを当てる手品に手を加えたただけけど。

「親父が選んだカードは、あのさっきまで親父が読んだ本に挟まってるんだ！」

「なるほど。開けて見せてごらん」

「うん。みててよ」

にっと笑って、そっとハードカバーのその本に手をかける――その前にもちろん、手には何も持っていない事を確認してもらってから。

余裕で笑ってる親父のポーカーフェイスを、今年こそは崩せるだろうかなんて、ちよっぴり期待してわくわくしながら。

一瞬、親父の顔に意味深な深い笑みが浮かんたその時に気づくべきだったんだ。

「う、わあっ!!!!」

本を開いた途端にそこから現れた鳩に、思わず叫んだ。驚いて腰を抜かして、ぽっかりと口をあけ、すっかり崩れたポーカーフェイスで、呆然とばさばさ飛ぶ鳩を見つめる。

ふっと小さく噴出す音が聞こえて、顔から火が出そうな思いになった。

「ははは、快斗。お前もまだまだだな」

楽しそうに笑う声に文句を言おうと口を開いた目の前に、先ほど飛び出してきた鳩がプレゼントを落とした。

「Happy Birthday! 快斗」

慌てて拾うオレの頭の上から、流暢な発音のそのお祝いの言葉が降った。顔を上げると同時にふわりと持ち上げられる。

「いや、お前も成長したよ。七歳か……マジックは成功のようだ」

そう言って、鳩のくちばしに咥えられたカードを抜き取った親父の手には、先ほど手品で使っていたトランプがあった。くるりと

親父の手で一回転したトランプのクラブのエースの柄が、オレの視界いっぱい映る。

「確かに、私の選んだカードのようだね」

オレが着ていた服の胸ポケットに、そっとそのカードが差し込まれる。

ぶーっと膨れながらそのカードを見つめるオレはまだ、親父には遠く及ばない事を知った。

「ら、来年！ 来年こそは、親父が驚く番だからな」

「そうだな。楽しみにしているよ、快斗」

宣戦布告だ。今度こそ、とっておきのマジックを考えてやろう。そう感じながら、今はとりあえず目の前のプレゼントを紐解いた。中から出てきたプレゼントに、純粋に喜んで。わくわくだらけの、幸せなバースデーを過ごした。

そしてその日の夜遅く、家を出て行く親父と送る母さんの声を聞きながら、布団で眠った。

ばたばたと風にマントを揺らしながら、本日の標的のあるビルを双眼鏡で見つめた。

大勢の警察官、ビルを囲う野次馬、ビルの中にいる名探偵とその

彼女。ふっと、口元から笑みが漏れた。

「ぼっちゃま？」

寺井ちゃんが後ろから、怪訝な視線を送りながら声をかけてきた。

「……思い出してたんだよ。10年前の今日、親父が生きてたバー
スデーの事」

あの夜、出かけたのは恐らく怪盗キッドの仕事の為だ。

そういえば次の日のニュースでは、キッドと工藤なんとかって推理小説家の人が対決した、とかあったが。あれが名探偵の父親とは、二代続いて因果なものだと思う。

寺井ちゃんはしみじみとした口調で応えた。

「盗一様……凄く嬉しそうな様子でした。快斗ぼっちゃまは毎年上手くなった手品を披露してくれる、と」

「ああ、だから今日は絶対にしくじるわけにはいかねーんだ。成長したオレから、親父への手向けとしてな」

父親の形見であるこの白い衣装を身につけている自分は、父の名を継いだのだ。無様な姿で居てはいけない。

子供の時よりも数段成長した手品で、どこかで見ている父にその成長を見せるために。

「行って来るよ、寺井ちゃん。見ててくれよ」

そう呟き、飛び立った。ぱっと開くハンググライダーはすぐに風にのり、目的のビルへとまっすぐ向かう。

” 快斗……十七歳の誕生日、今年はどんなマジックを見せてくれるかな？”

この白い衣装を着ている時は、絶対に負けられない時。

この空の高く上空から、親父がじっと見守っている気がするから。

「今日のオレは負けねーよ、名探偵」

そしてまた、宿命の対決が幕を開ける。

（後書き）

まーた、何を引っ張り出してきてんだ私は（笑）

というわけで、こんにちはーv 読んで下さった事ある方は、その節はどうもです（へーへ；

某所で、去年の快斗バースデーにあげた突発SSです。・・・其の日夜遅くに思い立って、零時過ぎた頃にアップしたなあ。

一年以上経ってほとぼりも冷めたし、まーいーや、と。

その時突発だったとは言え、一年前はつい最近なので、小さな手直し以外特に文章は変えておりません。

滅多に書かない珍しいものと、再アップの可能性もまた高くなるものです。（こないだのちび新蘭も、子猫もそうでしょ？）

てなわけで、滅多にない盗一パパとちび快斗とキッドと優作パパの出てくるお話デス。

必死だったなあ、私このとき。時間がないー><って♪

懐かしく思いながらの再録となりましたが、少しでもお楽しみいただけましたでしょうか？（へへ）

もし、楽しんでもらえたんだとしたら、引っ張り出して来た甲斐があったってものですv

反応などありましたら、今後の力に変えさせていただきますねー（

＊へへ＊）

それでは、お読みいただきましてありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9195e/>

父へ息子へ～永久なるMagic Show～

2010年10月18日07時06分発行